

はじめに

ネパールで学んだ地域活動実践の意義

地域活動実践センター長 澤崎 敏文

先日、サービスマネジメント（奉仕活動による学び）の一環として学生たちと共にネパールを訪問する機会を得ました。ネパールは世界最高峰エベレストがあることでも知られ、多くの登山家はその頂を目指します。一方で、経済的には決して裕福とは言えない地域でもあり、GDP（国内総生産）は私たちが暮らす福井県の半分程度（注）です。滞在中は、山岳地域での交流活動をとおして、多くのネパールの方々とは出会いましたが、そこで一番交わされた言葉は「ナマステ」。滞在したラムチェ村や訪問先の小学校で出会った子どもたちが笑顔で手を合わせて「ナマステ」と声を掛けてくれる姿が今でも目に浮かびます。旅行用ガイドブックなどでは「こんにちは」に該当する挨拶として紹介されることが多いナマステですが、その語源を現地の方に聞いてみると少し事情が違ようです。このナマステ、前半の「ナマス」は「敬礼、尊敬」を意味し、仏教の南無阿弥陀仏の「南無」とも同じ語源であるそうです。後半の「テ」は「あなた」を意味します。簡単な一言ですが、そこには敬意や感謝が込められており、相手を思いやる言葉だと知りました。

日本では「まちづくり」や「地域活性化」が叫ばれて久しく、そのような地域活動への学生参加を要請されることも多々あります。しかし、そもそも「まちづくり」とはどういう意味を持つ言葉なのでしょうか。ハード的な側面から考えると、都市計画

や建築・デザインという視点があります。一方で、ソフト的な側面から考えると、街をどうマネジメントしていくか、そこに暮らす人たちのコミュニティをどうやって形成していくかという視点も重要になってきます。このような状況の中、大学も地域の一員として社会貢献していくことが望まれています。しかし、「まちづくり」への明確な解答は実践の中だけに存在すると感じています。要するに、行動することが一番大切であるということ。しかし、一方的な自分の思いや自己実現のためだけになっては、せっかくの行動も本意から外れてしまうこともあるでしょう。私たちが考える社会活動実践は、地域の方々との協働であり、相手を、そして地域を理解したうえで実践して初めてその意図が達成されるのではないかと考えるのです。

実は、ネパール滞在中、現地の方々から「まちづくり」や「地域活性化」という言葉を聞くことはありませんでした。しかし、それはもしかすると、日常の中でこれらが当たり前実践されていることの裏返しなのかもしれません。小さいことからでも、まずは行動してみる。そして、お互いを理解し尊重すること。それらは、本学の建学の精神「仁愛兼濟」のなかにも強く表れていると感じています。地域活動実践センターは、今後もそのような地域との橋渡しとしての役割を果たしていきたいと考えています。

注：福井県民経済計算（平成25年度）および在ネパール日本国大使館資料「図説ネパール経済2015」を比較した。